

星野富弘の世界

The World of Tomihiro Hoshino

戸谷 順子
Sumiko TOYA

要 旨

本稿は、星野富弘氏の作品(詩画・口述筆記による文章)を国語科の教材とすることを目標に、宿泊行事(林間学校)に関連づけ、美術科と連携を取りながら行う形で取り組んできた授業実践報告である。

星野氏は、不慮の事故により障害を負うことになってしまった人生や、いのちについて考えられる詩の内容から、道徳の教材として作品が扱われることが多い。しかし、国語科の教材として氏の作品を捉えてみると、豊かな表現と強いメッセージ性に富み、中学生を対象に授業ができるのではないかと考えた。氏の作品を、多感でありながら多くの可能性を秘めた中学生に是非味わってもらいたいと考えたのである。そのために氏がどういう経歴を持つ人物であるのか、どのように生きていたのかから知り、作品を鑑賞する。都会から離れ、自然豊かな志賀高原で過ごす林間学校と関連づけて、生徒自身が詩の創作を行う。林間学校後に国語科から美術科の授業に移行させ、生徒祭で展示する作品を完成させる。作品完成後、生徒同士で互いの作品を鑑賞する。こういった一連の流れで今まで5回(5つの学年で)授業を行ってきた。これらの取り組みについて述べていくのが本稿である。

キーワード：星野富弘・詩画・詩の鑑賞・鑑賞会・フォトポエム・アートポエム

1. 星野富弘とは

星野氏の作品を見たことのある人は多いだろう。氏は体育教師として群馬県内の中学校に着任し、わずか3か月で不慮の事故に遭い、教師生活を断念せざるを得なかった。9年3か月に及ぶ入院生活の中で、口にサインペンや筆を加え、花の絵を描くようになり、その余白にことばを紡ぐようになった。そのようにして描かれた氏の作品が人々の目にとまり、個展が開かれ、作品集となり、美術館もでき、氏の作品が多くの人々の目に触れるようになったのである。

星野氏の作品は「詩画」という。自作の詩と、自筆の絵が融合して、1つの作品になっているため、このように呼ばれるのだ。そのため、氏の作品集は「詩画集」であり、氏の著作の表紙にもそう書かれている。

星野氏の略歴は表1の通りである。授業者が初めて富弘美術館を訪れたのは1997年。その後も、特に美術館がリニューアルされてから何度も訪れているが、完全バリアフリーの館内は、ゆったりとした造りとなっており、氏の作品を鑑賞するのに適した雰囲気である。美術館裏手には草木湖を望むことのできる遊歩道が作られ、季節の花々を間近に見ることができる。また、この辺りは田畑が多い、とてものどかなところであり、星野氏が自然豊かなところで生まれ育ったことを肌で感じることができるのである。



写真1 富弘美術館

表1 星野富弘氏略歴(富弘美術館ホームページより)

星野富弘氏 略歴	
1946年	群馬県勢多郡東村(現みどり市東町)に生まれる。
1970年	群馬大学教育学部体育科卒業。 中学校の教諭になるがクラブ活動の指導中頸髄を損傷、手足の自由を失う。
1972年	病院に入院中、口に筆をくわえて文や絵を書き始める。
1979年	前橋で最初の作品展を開く。退院。
1981年	雑誌や新聞に詩画作品や、エッセイを連載。
1982年	高崎で「花の詩画展」開催。 以後、全国各地で開かれた「花の詩画展」は、大きな感動を呼ぶ。
1991年	群馬県勢多郡東村に村立富弘美術館開館。
1994年	ニューヨークで「花の詩画展」開催。
1997年・2000年	ホノルルで「花の詩画展」開催。
2001年	サンフランシスコ・ロサンゼルスで「花の詩画展」開催。
2004年	ワルシャワ国立博物館での「花の詩画展」。
2005年	(新)富弘美術館新館開館。
2006年	群馬県名誉県民となる。
2010年	富弘美術館開館20周年。富弘美術館入館者が600万人を超える。
2011年	第1回群馬大学特別栄誉賞受賞。 現在も詩画や随筆の創作を続けながら、全国で「花の詩画展」を開いている。

2. 教材としての星野氏の作品

星野氏の作品(詩画や口述筆記による文章)が教材になる例はいくつかあるが、それらは以下に示すように、道徳の教材がほとんどである。

教育出版 小学道徳5年「花に思いをこめて」(よりよく生きる喜び)

東京書籍 中学1年 「花に寄せて」(生命の尊重 3-(1))

教育出版 中学1年 「愛・深き淵より」(生命の尊重 3-(1))

氏が頸椎損傷により重い障害を負ってしまったこと、それでも素晴らしい作品を多く世に送り出し続けていること、詩の中で「いのち」や「生きること」について触れている作品が多いことなどから、道徳の教材となるのは首肯できる。また氏の詩は、とても平易なことばで表現されることが多く、小学生にとっても読みやすいという利点もあるのだろう。中学道徳でも、1年生の教材として扱っているものがある。

星野氏の詩画集を見ているうちに、氏の作品を、中学国語の教材にできないかと考えた。中学国語としては、光村図書1年の教科書に氏の代表作「たんぽぽ」が単元の扉のページに載っているものがあるが、一つの単元にはなっていない。そこで、以下の点を踏まえて単元化したいと考えた。

- *星野氏の作品を読み味わうだけでなく、生徒による詩の創作と相互鑑賞を行う
- *詩画だけでなく、星野氏の文章にも触れさせたい
- *図書室の活用場面を入れる
- *美術科との連携(生徒自作の詩に絵を添え、1つの作品にすることは可能か)

授業者が担任として関わるができる学年では、教科の授業だけでなく、星野氏の作品を総合的な学習の時間でも取り上げたいと考えた。

3. 授業実践

〈準備として〉

授業に向け、まず最初に行ったことは、本校図書室に氏の蔵書を増やすことだった。氏の詩画の素晴らしさだけでなく、温かみのある素朴な文章に、少しでも中学生たちに親しんで欲しいと考えたためである。授業者の所有する作品集も合わせれば、授業時に多くの詩画集を生徒に見せることができるだろう。しかし、10年ほど前には本校図書室に氏の作品集がほとんどなかった。そのため、司書教諭に相談し、少しずつ氏の詩画集を購入してもらうようにした(表2)。

表2 本校図書室および授業者が所有する星野氏の作品集一覧

授業で使用した 星野富弘氏 作品一覧

書名	著者	出版者	出版年	図書室所蔵	授業者所有
1 愛、深き淵より	星野富弘	立風書房	1981.1		○
2 四季抄 風の旅	星野富弘	立風書房	1982.1		○
2 鈴の鳴る道	星野富弘	偕成社	1986.12	○	○
3 速さのちがう時計	星野富弘	偕成社	1992.4	○	○
4 あなたの手のひら	星野富弘	偕成社	1999.4	○	○
5 新版 愛、深き淵より。	星野富弘	学研パブリッシング	2000.5	○	
6 花よりも小さく	星野富弘	偕成社	2003.11	○	○
7 かぎりなくやさしい花々	星野富弘	偕成社	2004.11	○	○
8 星野富弘全詩集 1 花と	星野富弘	学研パブリッシング	2005.4	○	
9 星野富弘全詩集 2 空に	星野富弘	学研パブリッシング	2005.4	○	
10 山の向こうの美術館	星野富弘	富弘美術館	2005.4	○	
11 たった一度の人生だから	日野原重明 星野富弘	いのちのこぼ社フォレストブックス	2006.1	○	
12 星野富弘ことばの雫	星野富弘 星野昌子(写真)	いのちのこぼ社フォレストブックス	2008.7	○	○
13 新編風の旅 四季抄	星野富弘	学習研究社	2009.3	○	○
14 風の詩 かけがえのない毎日 詩画集	星野富弘 館内端(問いかけ人)	学研パブリッシング	2010.2	○	
15 種蒔きもせず	星野富弘	偕成社	2010.5	○	○
16 ありがとう私のいのち 星野富弘詩画集	星野富弘	学研パブリッシング	2011.11	○	○
17 ありがとう私のいのち 第1巻『風の旅』からのメッセージ 字を書きたい	星野富弘	学研パブリッシング	2011.2	○	
18 ありがとう私のいのち 第2巻『風の旅』からのメッセージ 絵を描きたい	星野富弘	学研パブリッシング	2011.2	○	
19 ありがとう私のいのち 第3巻『風の旅』からのメッセージ 友への手紙	星野富弘	学研パブリッシング	2011.2	○	
20 ありがとう私のいのち 第4巻『風の旅』からのメッセージ 小さな旅立ち	星野富弘	学研パブリッシング	2011.2	○	
21 いのちより大切なもの	星野富弘	いのちのこぼ社フォレストブックス	2012.12	○	○
22 詩画とともに生きる たくさんの愛につつまれて	星野富弘	学研パブリッシング	2015.8	○	
23 あの時から空がかわった	星野富弘	いのちのこぼ社フォレストブックス	2016.6	○	○
24 足で歩いた頃のこと	星野富弘	偕成社	2017.6	○	○

〈図書室の活用〉

星野氏の作品集は表2のように多くあるが、同じ作品集の新版であったり、テーマに沿って既存の作品を再録したものであったりするあるため、表2の中でも生徒に見せる作品集を20冊ほど選び、少しずつ購入し、図書室に置いてもらった。授業で扱わない作品集は、貸し出しもできるようにしてもらった。詩画集を教室に運ぶ手間を減らすこともあるが、生徒が気に入った作品集を昼休みや放課後にもう一度手に取り、借りることができるよう、図書室を利用した。また、この授業を行っている期間、司書教諭に依頼をし、図書室内に詩画集展示ブースも作ってもらった。

風船：小さい子が持っていた風船が、手から離れてしまって飛んでいってしまった。でも風船からすると自由になれた瞬間で、これからは自分の好きな所に行ける喜びがある。

しゃぼん玉：「風に吹かれて」飛んでいくもので、「きみたち」とあるから、一度にたくさん飛んでいくもの。飛んでいたら多くの人が「おっ」と思って目を向けるもの。

雲：「風に吹かれて」飛んでいくものと言えば雲。「きみたち」から、雲のかたまりが風に流されて形を変えて通り過ぎていく様子が思い浮かんだ。

渡り鳥：「旅する姿」を見て、「うれしくてならなかったよ」と言えるもの。そしてその姿を見れば「空をとべるような気が」するものから。

亡くなった人の霊：家族を思い、なかなかその場から離れられないのか霊が浮いている感じ。

孫や子ども：「旅する」は独り立ちして親や家族から離れていく若者ではないか。その様子をさみしさとうれしさが混じった気持ちで見送ろうとしている。

たんぽぽ：「きみたち」から、いくつもあり「ただ一つのものを持って」は綿毛についている種ではないか。「風に吹かれて」飛んでいくたんぽぽの綿毛を見て読んだ詩ではないか。

②この詩からどんなことを感じるか

- うまいかないことがあり、現実から逃げたいと思っているのだろうか。
- 毎日の生活に疲れているのだろうか、自分以外のものをうらやましく思っているのでは。
- 「余分なもの」とは、人間だったらいろいろな欲やお金、地位のことなのではないか。
- 草原のようなところに寝転がって、空を眺めている場面が想像できる。
- 孫や子どもに「次はいつ会えるかな？」と楽しみに思いつつ、都会でうまくやっていけるか心配な気持ちでいる。

③この詩を作った人はどのような人か

- 会社などで働くことに疲れた大人。辛いことをたくさん見てきて、生きることに疲れた老人。
- 思い通りにならない何かを抱え、楽しそうに空を飛んでいく鳥の姿に憧れを抱く男性。
- 孫か子どものことを大切に思う祖父母または親という立場である人。
- 小さいものにも目を向け、優しい気持ちを持つことができる人。
- 文字の印象から、とても優しい人のような気がする。
(文字に角張ったところがないため)

これらの意見が出された後、この作品全体(図2)をスクリーンに表示する。その後、星野氏の写真(上半身の写真)を見せ、この男性が作者であることを伝える。また、氏について知ってもらうため、ワークシートを配布し、次回読んでいくことを伝えた。



図2 「たんぽぽ」

第2時：星野氏の文章を読む

生徒に読んでもらう文章は「怪我をする前」「絵を描くこと」「入院中の母とのやりとり」「帰郷」「生かされている」とタイトルのついたものである。どの文章も私たちにとっては何でもない、当たり前前のことが星野氏にとってどれだけ大きなことか、当たり前前のことが実は当たり前でないことに気づかされる内容である。決して難しい表現を用いることはない、素朴な表現だからこそ、生徒の心に訴えかけるものがあるように感じる。

「帰郷」(星野富弘『四季抄 風の旅』1982年より)

長かった病院生活のあとに迎えたふるさとの春は、格別である。

縁側に日があたり、洗濯物が優しく揺れる下で、猫が柱をひっかいている。

時間をかけてゆっくりと自然にとけこみ、ついに平凡という極みにまで達した美しさが、毎日惜しげもなく目の前を過ぎてゆく――。なんだか、生まれて初めて、ふるさとで春を迎えたような気分だ。

竹やぶの葉のささやきを聞きながら、絵を描いていると、午前中はあつというまに終わってしまう。午後になると、首の動きだけで操作できる特注の電動車いすに乗り、一人庭に出たり、村道を散歩したり……。冬の間部屋に閉じこもることが多かったので、外に出られることがうれしくてならない。梅やつばきの花が、花瓶からではなく、土から生えた木に咲いているのさえ、新鮮に感じる。

れんげや菜の花はあまり見られなくなってしまったが、野の花は力強く残っている。

ふるさとの花で、スケッチブックをいっぱいにしようと思う。

第3・4時：詩画集の鑑賞・作品の特徴を話し合う

図書室ではペアで横に並んで座るよう指示をし、1冊の詩画集を一緒に見るようにしている。1つの机に詩画集を3冊ほど置き、一定の時間で合図をすると、生徒たちは近くのペアと見ていた詩画集を交換する。そうすることで、どの生徒も6～8冊の詩画集を見ることになる。ある程度詩画集を見た後、「隣の人と話しながら星野さんの作品の特徴を、見つけよう。見つけたらノートに箇条書きでメモをしよう。」と指示を出す。ペアでの話し合い後、発表させると、生徒からは次のような意見が出た。

[詩のことばから分かる、作品の特徴]

植物に話しかけるような表現が多い・家族について述べた詩がある(特に母について述べたもの)
植物と自分を重ねている・人間に足りないものを表現しようとしている・1連～3連で構成される
ダジャレのようなことば遊びもある・聖書のことばを引用している・人間に足りないものを表現
前向きな内容が多い・毎日の生活から感じることを植物に託して表現している・比喩表現が多い
よく出てくることば：いのち・神様・ありがとう・生きる

[絵から分かる、作品の特徴]

美しい花ばかりを描いているわけではない・退院後の作品は根っこの部分も描いている
枯れた葉っぱやしおれた花も描いている・全体的に淡い色合いが多い
果物や動物、物(例えば置物や家の窓ガラス)も描く・同じ花でも個性を見つけて描く
影をつけたり濃淡をつけたりして立体的に描こうとしている
花の部分だけでなく、茎や葉など植物全体を描こうとしている

これらの意見をノートに記録させたのは、生徒が林間学校で様々な植物を見かけたときの、またアートポエム(フォトポエム)を制作する際の参考になるからである。

そして、授業の後半で「林間学校で大自然に触れ、詩を作る」ことに取り組むと生徒に伝えた。その際、「何か一つ植物を決めて詩を読むといい」「植物に限らず、自然であるならば空や池、山を題材として創作もよい(ただし、「自然」から外れる対象物はなし)」の2点についても説明した。この時間の最後に、「星野さんのような視点・視野を持って、林間学校では多くの自然と向き合ってみましょう」と生徒に伝えた。

少し時間数に余裕のあった年には、星野氏の詩画をいくつか提示し、生徒が選んだ作品について鑑賞文を書く時間を設けたり、「星野さんにとって、詩を作ること、絵を描くこととはどのようなことだろうか」を考えさせ、それをノートにまとめさせたりした。よく書かれている生徒の鑑賞文は学年の廊下に掲示し、**図3**のようにノートに書かれたものでよくまとめられているものはプリントにし、生徒に配布した。

「星野富弘の世界」まとめ 秀逸作品

◆星野さんにとって、詩を作ること、絵を描くこととはどのようなことだろうか。

＊星野さんは、首から下が動かなくなり、何かをすることはとても難しいです。でも、その代わりに周りのことがよく目に入ったたり、深く考えたり、昔を思い出す機会が増えたと思います。そして、それを花とともに描くことで、感じたこと、考えたことをイメージと共に形として残したり、たくさんの人と共有したくて詩画を描くのだと思います。

(菊組 Mさん)

＊星野さんにとって詩画をつくるということは、生きるための希望、自分にとってできる唯一の他人に勇気や伝えたいと思うコトバを伝えられる手段で、人と関わる方法なのではないかと思う。自分の思ったことをそのまま描き、辛くても生きようと思える心のよりどころなのではないかと思う。

(蘭組 Mさん)

＊一つは、人生の生きがいであると思う。何故なら、寝たきりで自分一人ではほとんどのことができないのに対し、詩画作りは、周りの人に迷惑をかけず、そして自分の力でできることだからだ。寝たきりになってしまつてからは、詩画を作ることがお仕事にもなり、それと同時に趣味でもあるため、詩画作りは生きる原動力になっていると思う。

二つ目は、自分の考えや意見を効果的に人々に発信できる、もう一人の自分であると思う。星野さんは、しゃべることはできるけれど、体が動かないので、講演会とかは大変だと思う。だから、詩画に自分の命を吹き込んで、たくさんの人々に生きるといふことや日々のことについて伝えたいのではないか。

最後に、星野さんはキリスト教徒であることから、自分の詩を読んでもう一度、星野さんが少しでも生きる希望を持ち、その人の何か役に立てほしいという強い願いがあるから、詩画創作をしているのだと思う。

(梅組 Sさん)




図3 生徒の意見を載せたワークシート

第5時：互いの作品を鑑賞し合う

生徒祭期間中は生徒たちは係やグループの活動で忙しく、互いの作品を鑑賞する時間が取れないため、生徒祭後の国語科の授業で鑑賞会を行うようにしている。あくまで国語科の授業としての鑑賞会のため、絵の上手い下手で評価を決めるのではないことを伝え、**図4**のような評価用紙を生徒に配布し、3つの鑑賞の観点を提示した。

「鑑賞の観点」

- ①詩の世界観…自然と自分(人)の姿を重ね、「伝えたいこと」を持つ詩であるか。
- ②絵の世界観…描かれた絵は詩の世界観に合っているか。

③全体のバランス…文字と絵の配置に工夫はあるか。

作品を鑑賞する際は「ここ(作品を展示している教室前の廊下)を1つの美術館だと思い、作品を大切に扱い、静かに鑑賞する」「その作品を選んだ理由を、枠一杯に文章で書く(箇条書きにしない)」「最も多く選ばれた作品がどれであったか発表する」ことを伝えている。生徒たちは真剣そのもので、誰もしゃべることなく50分間集中して作品を鑑賞していた。事前に生徒には「教室に戻ってメモをしても構いません」と伝えた。選びたい作品の候補をいくつか絞り、それらのいいところをメモし、最終的にどの作品にするかを考える際、一度席に戻っては考え、もう一度それらの作品を見ては考え、を繰り返す生徒の姿も見られた。

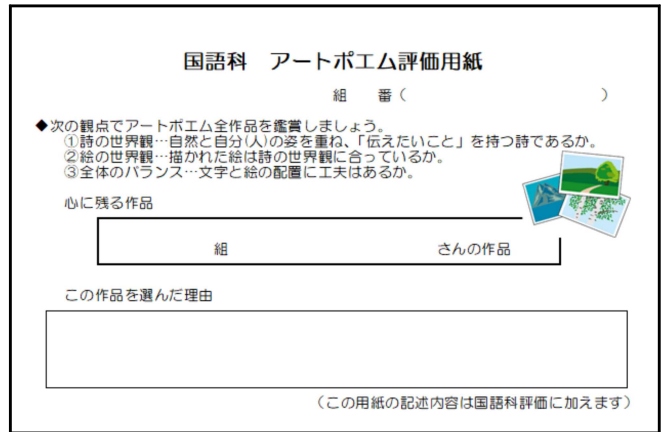


図4 評価用紙

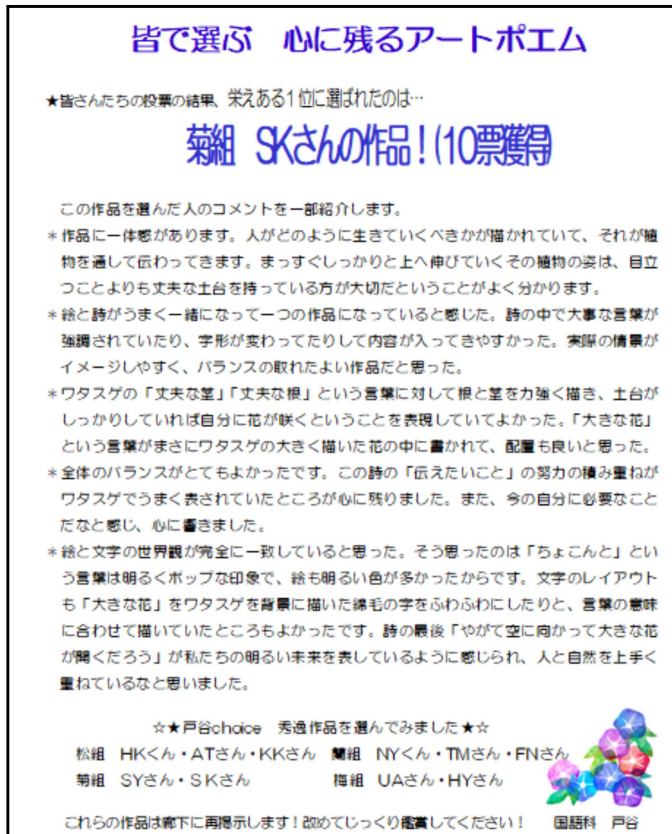


図5 投票結果発表表(生徒に配布)

評価用紙回収後：投票結果を知らせる
 評価用紙を投票用紙と見立て、生徒たちが選んだ作品を集計し、図5のようなプリントを作成して配布した(生徒氏名は書かずに、クラス名とイニシャルを記載。授業で配布する際には生徒名を授業者が発表するようにした)。
 選ばれた作品について、評価用紙に書かれた生徒のコメントを載せると、生徒たちはすぐにプリントを読み始め、読み終わった後は「あの作品だね」「あれはすごいと思ったんだよね」と周りの生徒たちと話す姿が見られた。

このプリントには、生徒たちに選ばれた作品だけでなく、授業者が選んだ作品も併せて載せるようにしている。そしてこのプリントに載った生徒の作品を再度廊下に掲示するようにした。すると、休み時間にそれらの作品を改めて見にくる生徒の姿が多く見られた。作品を作り、評価用紙を書いて終わるのではなく、鑑賞を経て再び作品を見る、作品を見て再び他の生徒の評価(配布されたプリント)を読む。そうすることで、作品制作、鑑賞会、ひいては星野氏への興味・関心が深まるのではないかと考えた。

4. 美術科との連携

先に述べたように、本単元は国語科の授業で星野氏の作品を鑑賞し、林間学校後に美術科の授業で1つの作品に仕上げる手順で行っている。生徒たちは美術科の授業で絵画の技法などを学び、1枚の

色紙に自作の詩と、詩の内容に合った絵を描くのである。林間学校後、生徒祭までの短い時間で生徒が作品を完成させることができるのはひとえに美術科の協力・指導によるものである。

生徒が制作した「フォトポエム」(写真2・写真3)と「アートポエム」(写真4・写真5)、それぞれを以下に載せる。



写真2 生徒作品(フォトポエム)

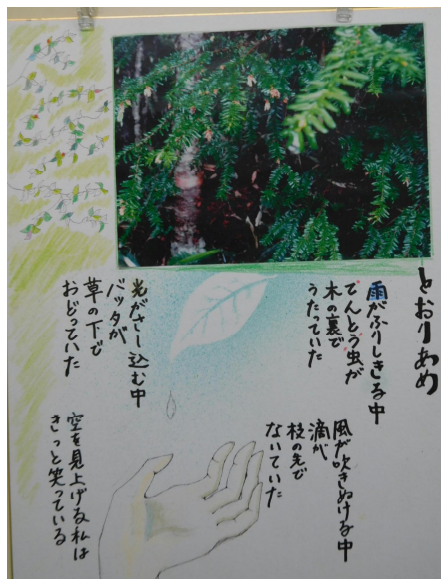


写真3 生徒作品(フォトポエム)

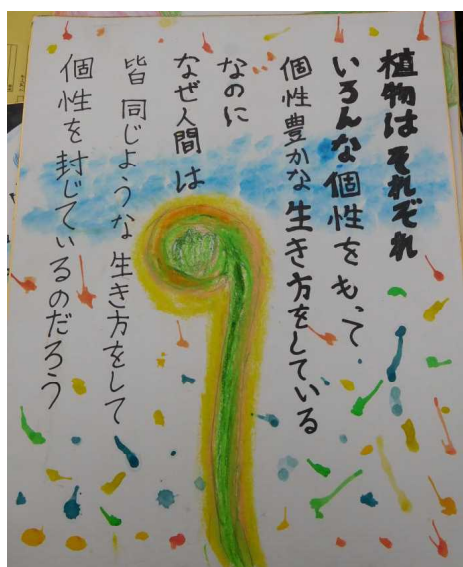


写真4 生徒作品(アートポエム)

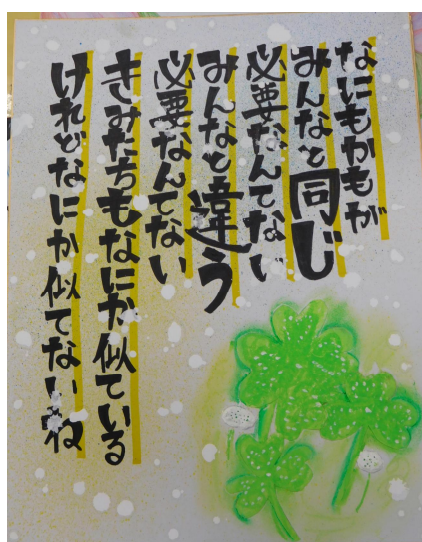


写真5 生徒作品(アートポエム)

5. 総合的な学習の時間として

2010年度入学学年では、総合的な学習の時間として「いのち」をテーマに3年間を通して様々な取り組みを行った。この学年が卒業を間近に控えた2013年、テーマ「いのち」の集大成としてJR御茶ノ水駅近くで星野氏の詩画展に3年生全員と共に行くことができた。この実践については本校研究紀要第42集(163頁～167頁)を参照されたい。

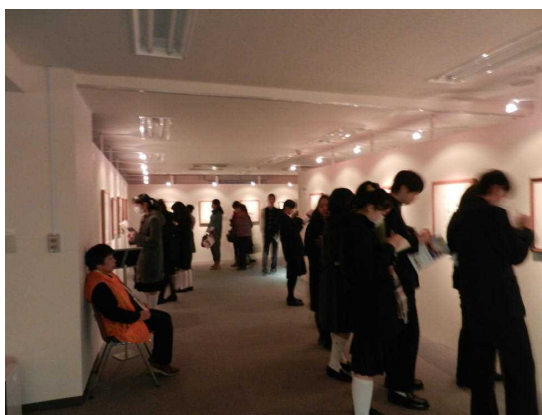


写真6 詩画展での生徒たち

6. 終わりに

本単元は、授業者が長く愛読している星野氏の作品を、中学生にも知ってもらいたい、氏の素朴でありながら奥深いことばの世界を感じてもらいたいと考え、国語科として単元化しようと試みた取り組みである。本校着任後、(着任初年度を除く)第2学年を担当した年で必ず取り組んでいる本単元を、これからも継続していきたいと考えている。

この授業を成立させるためには、図書室の活用と美術科の理解・協力が不可欠であった。本単元のために、限られた授業数の中で丁寧に生徒を指導し、作品完成に導いてくださった小泉薫前美術科教諭、桐山瞭子美術科教諭、図書室に星野氏の著作を用意し、展示ブースを快く作ってくださった岩崎春子前司書教諭、奥山文子司書教諭には心より感謝の意を表したい。

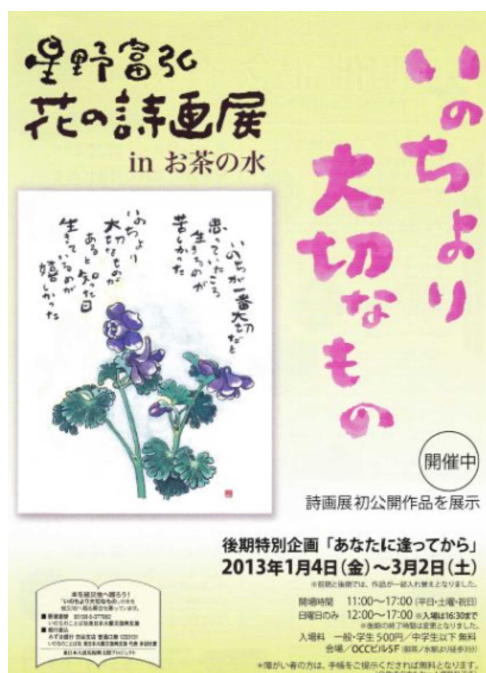


図6 生徒と訪れた詩画展の広告

写真7 星野氏の作品展示の様子(本校図書室)

【参考文献、参考ホームページ】

星野富弘『愛、深き淵より』立風書房 1981年

星野富弘『四季抄 風の旅』立風書房 1982年

星野富弘『種蒔きもせず』偕成社 2010年

星野富弘『いのちより大切なもの』いのちのことば社 2012年

星野富弘『あのときから空が変わった』いのちのことば社 2016年

富弘美術館ホームページ <https://www.city.midori.gunma.jp/tomihiro/> 2020年3月20日情報取得

今年度4月下旬に、星野氏の詩画展「花の詩画展2020」が銀座で開催される予定であった。授業者が担当する第1学年の生徒にこの詩画展を紹介し、5月の連休中に各自で詩画展に訪れるように伝えるつもりであった。しかし新型コロナの影響で生徒の入学・登校と、星野氏の詩画展が延期になってしまったことはとても残念である。